



2011年7月 第9巻第7号

かく語りき—聖人の言葉

「君は内面から外へと成長していかなければいけない。誰も君を教えることはできず、霊的にすることはできない。君自身の魂以外に教師はいないのだ。」
(スワミー・ヴィヴェーカーナンダ)

「解脱の助けとなる様々な要素の中で、最高位にあるのは強烈な信仰である。信仰とは、自身の真の性質を探求することである。」
(シュリー・シャンカラチャーリヤ)

今月の目次

- ・ かく語りき—聖人の言葉
- ・ 今月の予定
- ・ 5月の逗子例会 『利己的と非利己的のどちらが得か』
スワミー・メダサーナンダの講話
- ・ スワミー・ヴィヴェーカーナンダ
生誕149年記念行事
在日インド大使館 サンジェイ・パ
ンダ首席公使の挨拶

- ・ スワミー、三鷹で講話
- ・ 日本ヨーガ療法学会総会に出席
- ・ 国際シヴァナンダ・ヨーガ・ヴェー
ダーンタ・センターの東京センター
開所式に出席
- ・ 忘れられない物語
- ・ 今月の思想

今月の予定

・ 生誕日 ・

グル・プルニマ 7月15日(金)
スワミー・ラーマクリシュナーナン
ダ 7月28日(木)

・ 行事 ・

東京例会

講話 バガヴァッド・ギーター(無料)
8月6日(土) 14:00~16:00 東京・イ
ンド大使館(電話 03-3262-2391)
お問い合わせ 逗子協会
046-873-0428

逗子例会

8月21日(日) 10:30~16:30 逗子本館

5月の逗子例会

スワミー・メダサーナンダの講話 『利己的と非利己的のどちらが得か』

今日のテーマは皆さんに問いかけます。「利己的と非利己的ではどちらが得なのか。」これは言い換えると、利己的と非利己的ではどちらがより大きな見返りを得られるのかということです。人間は常に心の中で、「自分がこれをしたら代わりにどんな得があるのだろうか」と計算していますから、このようなテーマを問いかけることはごく自然なことでしょう。ここで大切なのは、「見返り」とか「得」とは何を意味するかということです。見返りを測る方法はいろいろあるわけですから、まずこの点からお話ししていきましょう。

自分の欲求や要求が満たされるのは、得や見返りであると考えられます。自分と家族のために食べ物、衣類、娯楽、家などがあれば、自分も家族も幸せです。自分や家族に美味しい物やいい服を与えることができれば、自分は幸せだと感じます。つまり、「幸福」とは物質的な見返りであるわけで、心はこれを求めて計算をするのです。

利己的と非利己的

さて、利己的、非利己的とはどのよう

なことをいうのでしょうか。利己的とは、自分のやっていることが自分や家族の利益に向けられている場合です。自分と家族のためにやるべきことをやるのは必要ですが、最愛の人たち以外のために働くこと、自分と関係のない人たちに仕えることが、非利己的ということ。非利己的の最も崇高な定義とは、自分と家族のことを全く考えないということではなく、他人のことも考え他人にも奉仕するということでしょう。

「幸福」とは普通、物質的に快適な生活を指します。では、物質的に快適な生活においてもっと「得」をし最大の「見返り」を得るにはどうしたらよいのでしょうか。利己的であること、これが一番です。利己的であれば、「自分と家族が物質的にもっと満たされた生活を送れるように」と働く気力が生まれます。では、この利己的の根本にあるもの、中心にあるのは何でしょう。利己的な考えはどうやって生まれるのでしょうか。

自己、自我、私を意味する英語の self という語は、すべて小文字で self と書く。肉体や心が中心の自己を指します。シュリー・ラーマクリシュナは、このような自己を小さい「私」、未熟な「私」、幻惑された「私」、無知の「私」と呼びました。この低い自己を満足させるには、私や家族の肉体、感覚、心の要求

を、おいしい物、よい服、楽しい仲間などで満たせばいいのです。なぜ私たちは、このように体や心や感覚という点から考えるのでしょうか。このように考えることは当たり前でこれを哲学的に説明することはできないのでしょうか。

利己的と自己保存

この理由は、マーヤーにあります。マーヤーは、アートマンという、より大きな喜びを私たちに与えたくないため、私たちに幻惑して肉体や心、感覚という低い喜びを求めるよう仕向けるのです。マーヤーの影響を受けている私たちは、この低い私に自然に集中します。私たちの神性はサマーディの恍惚とした喜びに浸ろうとしますが、マーヤーの遊びのせいで私たちはそうすることができないのです。

ヒンドゥーの聖典によると、偉大な創造主は初めに 4 人の聖者を創造しました。皆サットワにあふれており、誕生した途端、瞑想に没頭しサマーディに浸ったのです。しかし、これでは創造が続きません。そこで創造主は、サットワはごくわずかでラジャスとタマスの多い人々を創造し始めました。これらの人々はラジャスとタマスの性質が優勢であったため、肉体、心、感覚が中心でそれを満たすことに集中しました。

また、自己保存という自然の欲求がなければ生命は存在し得ません。そこで、生物は肉体を保存するという性質を発達させたのです。利己性の根本にあるのは、この自己保存の本能です。そして、自己保存の次は物質的な快樂と幸福の追求です。この目的のために、人々は日夜働いているのです。

相互依存

しかし、このような生き方には疑問があります。「利己的なままで、生きていくことができるか」という重要な疑問です。私たちは生きるために、他人のみならず、様々な動物、植物、そして自然に頼っています。食べ物を作っているのは誰でしょうか。自分ではなく農家です。では、洋服はどうでしょう。家は？自分ではありません、他の人です。このように考えていくとさらに、「私たちが食べるために、魚やニワトリ、羊、牛、豚など一体どれだけの命が犠牲になっているのだろう」と気づきます。

自然はどうでしょうか。空気や水、光がなかったら、私たちは生きられないでしょうか。自分で作り出すことすらできません。アインシュタインは次のように言っています。「自分の生活がどれほど多くの他人の力に支えられているか、日に何度気付かされることか。だ

から私も、どうやって他人にお返しができるか考えなければいけない。」このように、利己性も非利己性も両方が必要なのです。利己的なだけでは生きていくことはできないのです。

「もらっているのだから、お返しをする」のが礼儀ではないでしょうか。道徳心や倫理観が少しでもあればそう考えるのが普通であり、非利己的になるべき理由はここにあります。また、自分や家族の物質的欲求を満たすだけで真の幸福が得られるのでしょうか。肉体や心、感覚が満たされればそれで幸せと言えるのでしょうか。短期的、長期的の両方の観点から考える必要があります。世俗的物質的幸福はすぐに喜びを得られますから短期的にはよいでしょうが、問題は、このような喜びは長続きしないことです。

見返りを求める

世俗的な、物質的な喜びというのは短期的なもので、最後には執着が生まれます。そして、そこから失望、不満、苦しみ、束縛が生じるのです。私たちは皆生まれながらにして、永遠の平安や喜びを求めています。利己的な生き方の中心である世俗的物質的幸福ではそのような喜びを得ることはできません。先ほどお話ししたように、利己的であると「自分にはどんな見返りがあるのか」ばかりを考えます。夫も妻

も子供も互いにこれを問い、上司も従業員も皆がこれを問うのです。大抵の場合期待は満たされず、失望と不満が生じ、最後には人間関係が悪化する——これが、利己的な生き方の結果です。

人は「自分にはどんな見返りがあるのか」をいつも求めている訳ではなく、見返りについて考えないこともあります。しかし、もし家族が互いに「自分にはどんな見返りがあるのか」を求め合っていたら、家庭はピリピリとして些細なことで崩壊してしまうでしょう。

非利己的になる

これと対照的なのは、「私は与えるが、何の見返りも期待しない」という考え方です。見返りを期待しないのであれば、失望も不満も生じません。失望は、何かを求めても得られない時に生じるものですから、見返りを期待しなければ失望も不満も生じず、苦しむこともありません。非利己性のメリットはここにあります。苦しみが無いということは、その分喜びの余地があるのです。それだけではなく、利己的な動機を持たずに他者に仕えることで、質の高い、変わる事のない喜びを得ることになります。私たちのゴールが永遠の幸福であるなら、非利己的になって見返りを求めず奉仕をする後押しとなるでしょう。

神的な喜び、靈的な喜びを求めることについて、さらにこのように考えることもできます。世俗的な幸福は一時的であることが多く、苦しみの源となりますが、靈的な幸福は永遠です。非利己的であることは、靈性の光と途絶えることのない喜びや平安を得る助けとなります。

では、靈的な観点から非利己的になるにはどうしたらよいのでしょうか。利己的であることは肉体と心を中心ですから、このような考えを超越すればいいのです。真我（Self。大文字で始まる）、純粹なアートマンに意識を向けることで、私たちは肉体と心でできているという考えを超越し、利己性を超越することができます。他者の中にも同じアートマンを見ようと努め、他者への奉仕、お世話をするのです。アートマンの性質は無限の至福ですから、アートマンを認識すれば私たちは至福で満たされるようになります。

すべての人を神の子供だと考える

言い換えると、神様と私たちの間にある最大の障害は何か、私たちが自身の本性を悟るのを阻んでいるものは何か、ということになります。それは、私たちの小さい自我、エゴです。どうしたらこの小さい自我をなくすことができるのでしょうか。他者のことを考えて

お世話をし、自分を他者と同一であると見なし他者の喜びや苦しみを自分事として考えるのです。そうすることで自分の小さな自我の境界を越え、自らを普遍の存在にすることができるのです。他者に仕えることで利己心は消えて心が浄められ、自らの中にいる神を悟ることができるのです。靈的な光に通じる最良の道は、他者のお世話をし、非利己的になることです。これは、カルマ・ヨーガの教えと似ています。

このような非利己性の実践には、忍耐と信仰が必要です。これについてスワミー・ヴィヴェーカーナンダは有名な言葉を述べています。「非利己的な方が得をするのだが、人はそれを実践するだけの我慢強さがないのだ。」すべての宗教が、非利己性と思いやりを説いています。求道者は、礼拝や瞑想、ジャパを行うだけでは十分ではありません。神様の子供である他者に仕えることが大変重要です。

神様は、自分の子供の世話をしてもらえたらお喜びになるでしょうし、神を悟る助けにもなります。しかし、靈的な進歩を得ることや「見返り」のことなど少しも考えずにただ他者を愛しお世話をするという、もっと高い考えもあります。

偉大な聖者ダディーチ

ヒンドゥー教の聖典にダディーチという偉大な聖者が出てきます。神々と悪魔たちの大きな戦いで、悪魔たちが勝利を収めました。悪魔の王ヴリトラは、神と女神を全員天国から追放して天国を支配しました。神々は地球に避難をし、天国での地位を取り戻すことができるよう最高神ヴィシュヌに祈りました。

神々は、ダディーチの骨から武器を作ればそれでヴリトラを殺すことができるとお告げになりました。神々の王インドラは、偉大な聖者であるダディーチはまだ生きているのにそのようなことはできない、とこのお告げを受け入れようともしませんでした。しかし他に為す術がなかったため、インドラはダディーチの所に行き力を貸してほしいと頼みました。

普通の人であれば、大義のために命を捧げて骨を差し出してほしいと頼まれたら、断ることでしょう。しかし偉大な魂であるダディーチは、全世界と宇宙を司る神々のためなら喜んで命を捧げましょうと快諾しました。ダディーチは座って瞑想を始めるとブラフマンの意識に没入し、肉体を捨てました。このように、ダディーチは見返りなど考えずに自分の命を捧げたのです。この後物語では、偉大な聖者の骨で作った武器を使い、インドラはヴリトラを殺すのです。

ランティデーヴァ王

バーガヴァタムの中にも興味深い物語があります。これは、ヴィシュヌ神の信者であるランティデーヴァ王についてのもので、王は他者に仕えることを常に喜びとしていました。王はもらったものはすべて、王国の民と分かち合っていましたし、食事の時は周囲の人が全員食べたのを確認してから自分の食事を取っていました。

ある時飢饉が起きて、食べ物がだんだんと手に入らなくなってきました。そのような状況でもランティデーヴァ王は、皆が食べてからでないかと食べようともしませんでした。遂に食べ物がなくなりました。何も食べない日が数日続いた後、王にギーとハチミツを入れた粥が渡されました。家族らと粥を分かち合おうとした時、急にブラーミンの客人がやって来ました。王は喜んで客人に粥をいくらか分け与えました。客をもてなすのが先だからです。ブラーミンが食べ終わると、また客人が来ました。王はその客にも粥を与えました。遂に四人目の客もやって来て、王はまた粥を与えました。四人目の客が食べ終わった時、もう食べ物は何も残っていませんでした。

飢え続けた王は、今や死を迎えようとしていました。しかしそのような時に

王が唱えたクリシュナへの祈りは、世俗的な見返りも霊的な見返りも一切求めない、純粹な非利己性を表しており、ヒンドゥー教の聖典の中で最も有名なものとなっています。その祈りとは次のようなものです。

「主よ、八大神通力の獲得により備わる偉大さを、私は望みません

この世に再生しないようにとも祈りません

私の祈りはただ一つ、どうぞ他者の痛みを感じることが出来ますように

彼らの体に私が宿っているかのごとく

そして、彼らからその痛みをぬぐい去り、彼らを幸福にする力が授かりますように」

誰もが自信の幸福を神に祈りますが、この祈りは対照的です。王はこう言っているのです。「私は自分の幸福は求めません、他者の苦しみを取り除くことが願いです。」

ラーマーヌジャチャーリヤの例

マドゥヴァチャーリヤはヴェーダーンタの偉大な学派の一つの創始者ですが、ラーマーヌジャチャーリヤについて興味深い逸話があります。ラーマーヌジャチャーリヤは自分の師にこう言われました。「息子よ、今からお前にマントラを授けよう。このマントラでお

前は霊的な叡智を得ることが出来るが、秘密のマントラであるから誰にも言うてはならない。」ラーマーヌジャは、もし誰かにそのマントラを教えたらどうなるのかと尋ねました。師は答えました。「この秘密のマントラを知った者は悟りを得るが、お前は地獄に落ちるだろう。」

さてラーマーヌジャは丘の上に行って大勢の人々を集めると、師から教わった秘密のマントラを人々にくり返し教えました。師はこのことを聞きつけてラーマーヌジャに大変腹を立てました。しかしラーマーヌジャはこう言いました。「秘密のマントラで他の人たちが悟りを得られるのなら、私は地獄に落ちようと構わない。」

実践の方法

非利己性について話したり聞いたりするのは楽しいものですが、いざ実践しようとなると難しいものです。毎日の生活の中で非利己的になるにはどうすればよいのでしょうか。

一切の見返りを期待せず、お金や名声を得ようとか褒められようとか考えず、他者のお世話をするという方法があります。他者のお世話をすることは、経済的奉仕、肉体的奉仕、精神的奉仕、知的奉仕、霊的奉仕など様々な形があります。どのような形であっても、他者

への奉仕は必ず、非利己性を育む助けとなります。

無財の七施（しちせ）

ブッダの教えの中に、無財の七施というものがあります。これは、お金がない人でも実践できる奉仕です。

1 身施（しんせ）。体を使って奉仕をすることで、この最高のものが自らの命を犠牲にする捨身行です。

2 心施（しんせ）。霊的な奉仕のことで、他者に思いやりを持つことです。

3 眼施（げんせ）。温かいまなざしを向け、人に心の静けさや平安を与えます。目の語る力は大きいものですが、霊的な修養を積まないと内にある思いやりはなかなか伝わらないものです。

4 和顔施（わげんせ）。笑顔でいることです。笑顔は神のものであると言われていています。笑顔で他者と接することを小さなことだと思わないでください。笑顔はストレスを和らげる素晴らしいものです。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、何かしらの理由で悲しい、腹が立っただと感じていたら外に出て顔を見せてはいけないと言われていました。私たちは常に、姿勢や立ち振る舞い、態度などで

何らかの波動を伝えています。笑顔で、愛と慈悲の波動を他者に伝えることができるのです。

5 言施（ごんせ）。言葉の奉仕です。他者に優しく温かい言葉をかけましょう。

6 牀座施（しょうざせ）。席を譲ることです。女性やお年寄り、体の不自由な方など、必要としている人に席を譲ります。

7 房舎施（ぼうしゃせ）。我が家を一夜の宿に貸すことです。

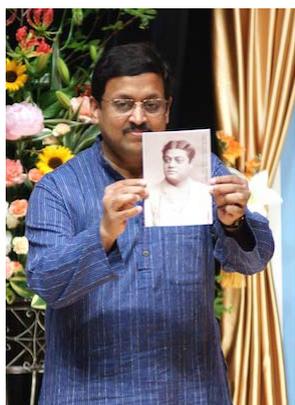
これらは奉仕の一例ですが、こうした奉仕を行うことで、私たちは非利己的になってより高い人生を送るのにふさわしくなれるでしょう。

最後に、今日のテーマにふさわしい、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの言葉を引用します。「誰もが偉大になることができる。それは誰もが奉仕することができるからだ。奉仕に大学の学位はいらない。奉仕に正しい読み書きを知る必要はない。ただ、優しさに満ちたハートがあればいい。愛から生まれた魂があればいい。」

2011年 スワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕149年記念行事
サンジェイ・パンダ首席公使の挨拶



(2011年5月22日に東京・インド大使館のオーディトリウムで開催されたスワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕149年記念行事でのスピーチを、本ニュースレターで数号にわたりご紹介します。第1回目の本号には、在日インド大使館主席公使サンジェイ・パンダ氏の開会の挨拶を掲載しました。)



スワミー・メダサーナンダ、日本ヴェーダーンタ協会会長。奈良毅、東京外国語大学名誉教授。上野理絵、コンパス社長。ご来賓の皆様、友人の皆様。

本日はスワミー・ヴィヴェーカーナンダの生誕149年記念行事に参加することができ、大変光栄に存じます。大変意義深いことに、この会は、去る3月11日、地震と津波が東北地方に甚大な被害をもたらした後、インド大使館

で行われる初めての行事となります。日本が未曾有の荒廃から立ち直ろうとしている今、「逆境をはね返すには自らの内なる力を発見せよ」と人々に高らかに呼びかけたスワミー・ヴィヴェーカーナンダの言葉は特別な意味を持ちます。スワミーの思想と人生に対する前向きな態度には、世界が称賛する、逆境から立ち直ろうとする日本人の気概と共鳴するものがあります。スワミー・ヴィヴェーカーナンダはこうおっしゃいました。「後ろを振り返るな - 無限のエネルギー、無限の熱意、無限の勇敢さ、そして無限の忍耐をもって、前を向くのだ。そうすることによってのみ、人は偉業を成し遂げられる」。

日本が3月11日に自然の猛威に直面して以来、インド国民は、ブジを襲った地震や、インド洋大津波など、インドが困難に直面した時にはいつも駆けつけてくれた日本の友人たちの身を案じてきました。今こそ、たとえささやかな行為であっても、インドが日本に手を差し伸べるべきではないのかと。災害の甚大さを鑑みると、インドの貢献はほんの形ばかりのものだったかもしれません。しかし今回の救援活動は、スワミー・ヴィヴェーカーナンダが理想とする、同胞意識と普遍的な兄弟愛に再び火を灯してくれました。

本日の行事は、前向きな思考と人類へ

の奉仕を通じて高い精神性を獲得するというスワミー・ヴィヴェーカーナンダの哲学を振り返るいい機会になると思います。スワミー・ヴィヴェーカーナンダは、人の生は運命で定められているという考えを認めず、すべての人々に対し、他者のため、そして人類のために奉仕することを奨励しました。スワミーのこんな名言を思い出します。「我々は自分の人格について責任を持っている。我々は、こうでありたいと望む自分になる力を持っている。もし現在の自分が過去にとってきた行動の結果であるならば、人はこうなりたいと願う未来の自分を、今この時の行動をもって、作り上げることができる。よって、人は皆、いかに行動すべきかを認識していなければならない」。真の洞察力を持った人物ならではの奥深い言葉だと思えます。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダはまた、自らの運命を選び取る人間の力に揺るぎない信頼を置いていました。自らが「カルマ・ヨギ」（積極的に行動する人）であったスワミーは、「人は皆、内なる力を持っている。あなたは何でも、どんなことでも成し遂げることができるのだ」と説きました。ある時、ヒマラヤの長い山道を旅していたスワミー・ヴィヴェーカーナンダは、疲れ果てた老人が上り坂を前に立ち尽くしているのを見ました。この老人は、これから登らなければならない険しい

坂道を見つめ、苛立った様子でスワミーに言いました。「これ以上どうやって登ればいいのでしょうか、もう歩くことすらできないのに」。スワミーは老人の言葉に辛抱強く耳を傾け、こう言いました。「足元を御覧なさい。あなたが踏みしめている地面は、これまであなたが歩いてきた道です。あなたの目の前にある道と、同じ道です。あなたの前にある道も、これからあなたの足によって踏みしめられるのです」。この言葉に勇気づけられ、老人はまた山を登りはじめました。今の世界において、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの、人間の不屈の精神に対する信頼、そして逆境に直面しても恐れずに立ち向かっていくという教えは、かつてなかったほどの重要性を持っているのです。

1893年、シカゴで開催された世界宗教会議でインドからのメッセージを世界に伝えた時、スワミー・ヴィヴェーカーナンダは30歳という若さでした。スワミーの世界へのメッセージは、力強く、明快なものでした。「インドは人類の英知に、精神性と哲学をもたらした」。世界の人々は畏怖の念を持って、スワミーの言葉に聞き入りました。スワミーは、インドには哲学的な、また精神的な真実が存在するが、一方で近代科学の知見や抜本的な改革が必要だと考えていました。今日のインドが、スワミー・ヴィヴェーカーナン

ダが描いた理想の国家像を実現しつつあることは、喜ばしいことであります。インドの栄光を復活させ、個人がそれぞれの精神性を体現していくための旅はすでに始まっています。国際社会では、インドがよって立つところの原則、国を挙げての努力やこれまでの実績について、正しい位置付けがなされています。これはまさに、「インドの英知の伝道師」であったスワミー・ヴィヴェーカーナンダのおかげと言えましょう。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダは1893年シカゴで行われた世界宗教会議に向かう途中に来日し、国家としての日本、人々の行儀のよさ、当時の社会発展、芸術や技術に感銘を受けました。スワミーはとくに日本の技術の進歩に感心し、その後インド人の若者に会うたびに「技術を勉強したいなら、西洋諸国ではなく日本に行くように」と助言したほどでした。

日本ヴェーダーンタ協会は宗派にとらわれないアプローチ、そして精神文化や他の文化に関するプログラムを通じ、宗教の調和や人間の価値観について幅広い層の人々を啓蒙してきました。この機会に、ヴェーダーンタ協会、とくにスワミー・メダサーナンダに対し、忠実な貢献を通して印日の精神的な繋がりや社会的道徳観を豊かにし、両国に特別な絆をもたらして下さって

いることにお祝いを申し上げます。

個人的な話ですが、私はとくにラーマクリシュナ・ミッションには親しみがあります。私は子供の頃から、ラーマクリシュナ・ミッションとスワミー・ヴィヴェーカーナンダの哲学やヴィジョンに大きな影響を受けており、このことを幸運であったと考えています。私が4歳の頃、初めて通うことになった学校は、ラーマクリシュナ・ミッションの学校でした。自己が形成される幼児期の4年間、この学校で教育を受けられたことは誠にありがたく、また国から国へと渡り歩く外交官となった私の仕事にとっても、多いに有効であったと思います。インド国民はスワミー・ヴィヴェーカーナンダを、インドを代表する永遠の大使として尊敬しています。

40年という短い生涯でありながら、スワミーは時間の砂にくっきりと足跡を残して行きました。私はスワミー・ヴィヴェーカーナンダの思想がこれからも私たちを導き、啓発してくれることを望んでいます。スワミーはこうおっしゃいました。「物事を美しくするのも、醜くするのも、私たちの気持ち次第である。世界は私たちの心の中にある。正しい光に照らして物事を見るよう、そして常に前向きに考えるよう努めよ」。

スワミー、三鷹で講話

6月18日(土)、スワミー・メダサーナンダは東京都三鷹市の「沙羅舎(さらしゃ)」主催の「いのちの学校」に招待され、『マヤーとブラフマン』というテーマで講話を行いました。以下、協会の隔月発行誌『不滅の言葉』掲載論文の翻訳者の一員でもある町田榮さんから寄せられた報告を一部編集してご紹介します。

「マハーラージの講話の大筋は『ありとあらゆる変化するものは真の实在ではなく、ブラフマンは真に実在するものであり、同時に永遠に実在するものでもある。変化するものはマヤー、シャクティ、プラクリティ、アギヤーナとも呼ばれ、真の实在を隠す力と偽りの姿を投影する力を持つ。変化するものと変化しないものの厳格な「識別」を繰り返すことにより、真の实在を理解することができる』というものでした。

参加者は三〇名で、その大部分はヨーガに興味を持つ方々でした。そして初めて識別の道についての話を聞く人もいて、とても興味深く聞いておりました。いのちの学校の終了後、食事会が行われ、美味しい自然食を囲んだ参加者とマハーラージとの楽しい交流会がもたれました。」

スワミー、日本ヨーガ療法学会総会に出席

6月25日(土)、スワミー・メダサーナンダは札幌で開かれた第九回日本ヨーガ療法学会に出席し、「開会の祈りと閉会の祈り」を行いました。スワミーは毎年この学会に招待参加しています。今年も、新潟大学大学院教授で免疫療法の有名な専門家である安保徹医学博士が『呼吸法と免疫力』というテーマで、また当協会に講演に来ていただいた日蓮宗現代宗教研究所顧問の影山教俊師(人間行動学博士、PhD)は『ガン統合医療とヨーガとスピリチュアリティ』というテーマで講演をなさっていました。参加者は約1千人でした。

6月25日(土)、スワミー・メダサーナンダは札幌で開かれた第九回日本ヨーガ療法学会に出席し、「開会の祈りと閉会の祈り」を行いました。スワミーは毎年この学会に招待参加しています。今年も、新潟大学大学院教授で免疫療法の有名な専門家である安保徹医学博士が『呼吸法と免疫力』というテーマで、また当協会に講演に来ていただいた日蓮宗現代宗教研究所顧問の影山教俊師(人間行動学博士、PhD)は『ガン統合医療とヨーガとスピリチュアリティ』というテーマで講演をなさっていました。参加者は約1千人でした。

スワミー、国際シヴァナンダ・ヨーガ・ヴェーダーンタ・センターの東京センター開所式に出席

6月26日(日)、スワミー・メダサーナンダは国際シヴァナンダ・ヨーガ・ヴェーダーンタ・センターの東京センター(杉並区高円寺)の開所式に招待参加し、『肯定的に生きるための霊的な道』というテーマで講演を行いました。同開所式の英語による報告が同センターのナラヤニ・ノリコ氏から寄せられましたので、一部編集の上、ご紹介します。

「6月26日、国際シヴァナンダ・ヨーガ・ヴェーダーンタ・センターの東京センターが正式に開設されました。午後1時から式典が執り行われ、まず在京の高名なバラモンであるパンダジによってガネーシャの儀式が執り行われました。次いでテープ・カットが、シヴァナンダ・センターのスワミー・マハデヴァナンダジと日本ヴェーダーンタ協会会長のスワミー・メダサーナンダジにより行われました。引続いて次の四名の方々による講演が行われました。

まず、スワミー・マハデヴァナンダジは『この日本社会におけるヨーガの必要性』について話され、スワミー・メダサーナンダジは『肯定的に生きるための霊的な道』というテーマの下

で真に肯定的な生き方とは何か、肯定的な考え方とは何かについて話されました。次いで、パラヴィディヤーヤ・ケンドラムのセトナ氏が『ヨーガとヴェーダーンタ』のテーマでお話しになり、最後に、スワミー・ヴェンカテシヤナンダジの書いた『シヴァナンダ・ヨーガ』を和訳した成瀬 貴良(きよし)氏が『いかにしてシヴァナンダと出会ったか、その教えとはなにか』についてお話しになりました。

講演の後、ジミー宮下氏のサントウルとユーコ氏のターンブラーによるインドの古典音楽演奏が行われて、式典は終了しました。

忘れられない物語

超然

師は大変質素に暮らしていたが、裕福な信者らをとがめようとしなかった。弟子らはこのことに大変興味を持った。「人が金持ちでありながら神聖であるのは、珍しいことだが不可能ではない」とある日師は言った。

「どうやったらそれができるのですか。」

「金が心に及ぼす力が、あの竹が庭に落とす影の如きであれば。」

弟子らは振り返った。そこには、竹の影がひとかけらの塵も舞い上がらせることなく庭の上で揺れていた。

ひと言：感覚の対象の中を動いても執着や反発が生まれず、自己を抑制した魂は、永遠の平安を得る。(バガヴァッド・ギーター)

(Anthony de Mello 神父の著書より)

今月の思想

「道徳的影響を最も強く与えるものは、手本である。」

(Huston Smith)

発行：日本ヴェーダータ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp